

アジアにおける近代日本

——その光と影——

衛 藤 藩 吉

本稿の目的は、中国における政治的諸変動に対する日本人の態度を、「中心周縁関係」と「愛憎症候群」と、二つの仮説をもって分析しようとするところにある。

I 欧米は中心、日本は周縁

近代史を勉強すればするほど、日本人は奇妙だと思う。第二次世界大戦中、日本国民はアジア解放を国策とし、白人と闘うのが日本人の使命であると主張した。1941年12月太平洋戦争が始まるまで、永年にわたる中国人との戦いは、多くの日本人にとって、何となく感覚的には不安であった。その人たちが12月8日対英米宣戦布告を聞くや否や、暗雲が晴れたような気持になったと言われている。それまで陸軍への献金運動に絶対協力しなかった岩波書店の創設者岩波茂雄すら、英米との戦いなら別だと言って戦争へ積極的に協力し始めたという。白人の捕虜に対して多少でも人道的に遇する者は、たちまち批判された。

それほど白人に憎しみをもっていたその同じ日本人が、ひとたび敗戦に遭うや否や、アメリカの白人兵に対してきわめて従順であった。敗戦後数ヵ月しかたっていないのに、連合軍最高司令官マッカーサーの誕生日にあたって、多くの小学生たちが先生に引率されて、玄関前に集まり、誕生日を喜ぶアメリカの歌を歌って祝った。1950年夏、朝鮮戦争の初期、マッカーサーは朝鮮半島全土の占領を考え、時のトルーマン大統領はこのような積極策が、北京政府を刺激することを恐れていた。その後、中国人民解放軍の大規模介入に対して前者は大量報復を主張、後者は絶

対に反対であった。ついにトルーマンは太平洋の小島ウエーキ島まで出かけて行き、東京のマッカーサーを呼び出して説得にあたった。なおマッカーサーは聴かない。ついにトルーマンはマッカーサーを解任した。その時一部の日本人がこの解任された最高司令官のため、マッカーサー神社を建設しようという運動をおこした。もちろん成功しなかったが。米軍の占領時代、多くの日本人は、アメリカ人自身よりも占領政策に対して忠実であった。

日本知識人の中にはフランス心酔者が少なくない。パリを夢見、パリの街の地図を記憶して、あたかも自分の育った故郷であるかのごとく懐かしむ。時にはフランスの話をしながら目に涙を浮かべる。日本を批判する時、常にフランスと比較する。イギリス心酔者も少なくない。彼らの中にはシェークスピアを世界最高の文学と信じ、それを読んでいない者を軽蔑する。またオックスフォードのアクセントを見習おうとし、アメリカ流の英語を軽蔑する。——もっともオックスフォードのアクセントに習熟する日本人は稀有であるが。

これらの日本知識人は欧米文化に心酔するだけではない。その心理には盾の反面として必ず強い対抗意識が存在する。

森鷗外は明治日本人の中で、ヨーロッパを理解する点では最高の知識人であった。しかし同時に、ヨーロッパに対する強い対抗意識があった。彼の短編に『大発見』と題するものがある。その要旨は以下の通りである。ある若い日本の医学生がドイツに留学した。ベルリンで日本公使Aに表敬訪問をしたところ、何を勉強に来たのかと尋ねられた。衛生学を勉強しに来ましたと答えると、この公使は嘲笑するように言った。「なに、これは驚いた。足の指の間に縄をはさんで歩いたり、鼻くそをほじくったりする国民に衛生学とは驚いた。」この若い医学生は公使の言い方に憤激した。それ以来、彼は必死になってヨーロッパ人が草履をはいていないか、鼻くそをほじくらないか探し求めた。草履については簡単であった。ローマのサンダルは草履に似ていた。しかし鼻くそをほじくる

ヨーロッパ人を見つけることはできなかった。留学中もできなかったし、小説戯曲の中でも見つけることはできなかった。それから十数年後、中年になったこの元ドイツ留学生は、デンマークの作家グスタフ・ウィードの作品を読んでいて大発見をした。その中に鼻くそをほじくる風景が出てきたのである。小説『大発見』の最後は「見よ、一人の水夫がカウンターによって談笑しながら巨大なる丸いものを彼の鼻からほり出しているではないか。前ドイツ駐割特命全権公使A子爵閣下よ、ヨーロッパ人も鼻くそをほじくりませよ。」

II 中国は中心、日本は周縁

同様に2千年来日本は中国文明圏の周縁に位置してきた。東アジアにおいてもっとも早く農耕民族として巨大な富を蓄積した漢族は、その富のうえに巨大な文明を築きあげた。中国王朝は常に東アジア文明圏の中心であり、圧倒的な文化の力をもって日本列島に2千年間に渡って影響を与え続けてきた。日本人にとって中国は文明の中心であり「聖賢無双の国」として憧れの的であったのである。とても中国にはかえません、という強い劣等感と、他方で、なに負けるものか、という対抗意識とが、日本人の心理の中にたえず葛藤を続けてきた。対抗意識の面で1つだけ例をあげよう。

謡曲に『白楽天』と題する一曲がある。それを要約すると以下のようになる。白楽天は勅命を受けて、日本人の知恵をはかるべく日本に船出した。九州のある浜辺に上陸して、老漁夫に出会った。お互いに自己紹介をしたところ、この老漁夫は詩の競争を申し出た。白楽天が漢詩を一つ作ると漁夫はただちに和歌で応じた。何度か繰り返した後、漁夫は舞踊を競おうと申し出た。たえなる音楽に応じて漁夫は優雅な舞いを舞った。そして白楽天にむかって、日本人の知恵を試すことなどおもしろいとまって中国に帰ったらいかが、と悟した。白楽天はこの老漁夫に深い感銘を受け、再び帆をあげて中国に帰った。白楽天はこの老漁夫が何者で

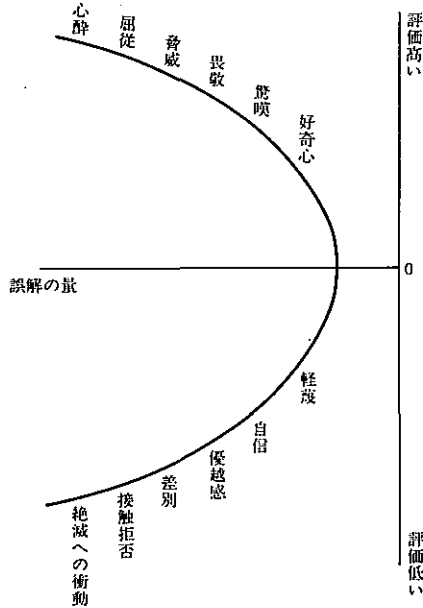
あるかを知らなかったが、これこそ住吉明神の化身だったのである。白楽天が日本において最もよく知られた中国の詩人であることを想起すれば、この謡曲の作者世阿弥が中国文明に対して強い対抗意識をもっていたことが理解されよう。⁽¹⁾

その中国が清朝末期に急速に衰えたという。そして西欧列強に敗北をしたという噂は、いち早く長崎を通じて日本知識人に大きな衝撃を与えた。江戸時代『阿芙蓉彙聞』と題する、長崎における阿片戦争に関する聞書は、各地の図書館に写本として蔵されている。すなわち当時いかに日本の知識人が外界の事情を知りたがったか、そしてそれを争って写本にしたかということが理解されよう。

明治維新前、1850年代から60年代にかけて、若干の日本人が中国の現実を見る機会があった。当時は太平天国の内乱で中国の政治も社会も混乱をきわめていた。そして上海には英仏軍が駐屯し、傲岸不遜の態度で中国人にのぞんでいた。かつて中国を聖賢無双の国と憧れた日本知識人は、その中国の現実を見るに至って急速に尊敬の念は軽蔑の念にかわっていった。しばしば日本人の中国人に対する蔑視は甲午戦争から始まるといわれるが、それは俗説である。すでに1860年代から急速に日本の知識人の間に広がっていったのを示す多くの資料がある。

III 愛憎症候群

異質の文化が接触したとき、その接触の態様、速度、圧力などの程度によって、穏和な接触状況と、激烈な状況とにわかれる。驚嘆したり、好意のある関心を寄せたり、その魅力にひかれたり、素直に理解しようという気持になったりすることは一般に穏和な文化摩擦の状況といえるが、この摩擦の程度が激烈になると「愛」の方は好奇心や驚嘆から始まって、畏敬、脅威、屈従、心酔と展開し、「憎」の方は軽蔑、自信、優越感、差別、接触拒否、そして最後には相手を絶滅させたいという衝動にまで及ぶ。このように文化摩擦が激烈な状態を私は愛憎症候群(love-hate



第1図

syndrome)とよびたい(第1図参照)。

心酔や屈従は一見摩擦のもっとも激しくない状態のように見えるけれども、実はそうではない。心酔や屈従という状態は自己が背負っている文化とその価値の否定、すなわち自我の否定につながるから、その心理は複合心理コンプレックスであり、意識下には激しい緊張が存在する。それ故、深層心理にのみ存在していた緊張が、表層心理に浮び上って、一旦顕在化するとその摩擦は激しい。それを、国際社会における国民心理を見るに、正当に相手国民を理解していればいる程 love-hate syndrome は小さい。たとえばイギリスとフランス、カナダと米国などのように、隣接して接触の度合が濃くても、激しい心理的緊張を惹き起こすほどの利害対立が相継いで生起しないかぎり、誤解の程度が小さくて、衝動的情緒的に愛憎を燃えあがらせることが少ない。しかし、ポーランドとロシア(ソ連)、

日本と中国そして日本と朝鮮との間には地理的な近さにもかかわらず、否、地理的に近いからこそかえって、激しい利害対立が相継いで生起すると相互に衝動的情緒的イメージを創出し、やがて複合心理を醸成して、その複合心理のゆえの誤解の程度は大きいといえる。

元来「誤解」自体は人間社会において免れがたい現象であり、恋愛のような甘美な現象も、相互の誤解なくしてはまったく成立しない。しかしそれが病的複合心理となれば、それ自体が国際社会でしばしば紛糾の原因となる。明治日本人の中国革命に対する態度は、この愛憎症候群の仮説によって、いっそう分析を深めることができよう。⁽²⁾

IV 亜洲と西洋

ナポレオン戦争あたりが転機ではないかと思う。それ以前には、北東アジアはヨーロッパより強かった。たとえば、17世紀半ば東シベリアに進出したロシア人はアルバジン(中国名・雅克薩)に城塞を築いた。清朝の軍隊はこれを撃ち、それぞれ勝敗を分けたが、最後には愛琿を根拠とした清軍はついにアルバジンの守将を倒し、これを開城させた。1689年のネルチンスク条約によってここは清朝の領土と確定されたのである。当時清朝の軍事力は強かった。その実力をもって北東アジアには中国文明圏の国際体系が形成されていたのである。それは中国の中央王朝を盟主とし、その周辺で清朝の軍事力の及ぶところは領土ないし藩属であり、その軍事力の及ばないところは中国伝統の文明の力をもって朝貢国とし、一種の安定した国際体系を形づくっていた。朝貢国には朝鮮の李王朝、ベトナムの安南王朝をはじめとし、ビルマ、琉球などがあり、その外側には日本のように中国文明を受け入れ、中国との友好関係を安定的に維持する国があった。

したがって17世紀以後、ヨーロッパの船が絹と茶とを求めて広東に來航し、広東貿易が大いに発展した背景には、この清朝を中心とする国際秩序をヨーロッパの諸東インド会社が受け入れ、その体系の中に編入さ

れることに甘んじた、という重大な事実があったのである。だから当時の清朝公文書を見るとヨーロッパ諸国は、英、仏、蘭等すべて嘆、嘖、嘖と書かれている。中国では口は汚いものであり口偏をつけることは一段相手を^{たぶ}貶しめることになる。そしてこれらの国々はすべて広東貿易の制度の中では朝貢国扱いにされ、臣下の礼をとらされたのである。

ところが、18世紀後半、西ヨーロッパに産業革命が起こり、アメリカ独立戦争、フランス革命戦争そしてナポレオン戦争と相継ぐ戦争の中で、たいへんな技術革新が行なわれた。大砲は鋼鉄を使うことによってその射程を大いに伸ばした。砲兵士官ナポレオンはまさに大砲を巧みに使うことによって全ヨーロッパを征服したのである。軍艦は帆船ながらもその速度を増し操縦性は著しく高まり、そして新型の大砲を装備することによってその戦闘力は著しく増した。

18世紀まで清朝の駅遞制度、道路の整備等はヨーロッパよりまさっていた。当時の西ヨーロッパは、チャールズ・ディッケンズの『二都物語』に出ているように、ロンドンからドーバーまでの主要幹線道路ですらも御者たちが鉄砲を抱え、強盗の脅威におびえながらお客を運ばねばならなかったほど、治安が悪かった。それに比べて清朝の中国や徳川時代の日本ははるかに治安がよかった。

ところが19世紀に入ると様相が一変する。西ヨーロッパにおいて、道路は急速に整備され、都会の下水道も整い、そして近代国家として社会の治安も著しく改善された。それなのに中国は変わらない。いや、変わらないどころか乾隆の治世も末年におよんで白蓮教の大乱が起こり、国家財政が一挙に困難になった。その後、内乱が相継ぎ、治安は急速に悪化し、衰微は歴然として現われてきた。北東アジアにおける欧米勢力の軍事力が、次第に清朝のそれをしのぐようになる。1816年、アマースト卿がイギリス国王の使節として北京を訪れたとき、対等の独立国間の儀礼を主張したため北京から放逐された。これが北東アジアにおける中国文明圏伝統の国際体系を主張する最後の成功した事件であった。その後

は、伝統的な国際体系を主張すればするほど、欧米からの圧力は高まる。

兵器は産業革命を経た欧米諸国では急速にその威力を増し、清朝のもつ兵器とは格段の差が生じてきた。1830年代になると欧米の軍艦は700トン、800トンというのがざらに出てくる。これに対して清朝の兵船は50トンがせいぜいであった。欧米の軍艦一隻がよく数十隻の清国の兵船と戦えるほどに差がついてくる。このような軍事力の均衡の変化を背景にして1840年から42年までアヘン戦争が戦われ、引き続きアロー戦争、太平天国の乱、清仏戦争と清国は外憂内乱に悩まされ続ける。

アヘン戦争の情報は、たちまち幕末の日本人に伝わった。日本の知識人たちが世界の体制を知りはじめた当初、かれらの脳裏に描き出された国際体系のイメージは弱肉強食であった。国際社会は弱肉強食なのだから国家は強くなければいかぬ、というのが当時の日本、否、北東アジア全体の共通した解釈であった。

ところが幕末、西欧の衝撃に直面して、日本の知識人の議論は2つに割れた。清朝が欧米に敗れたのは、伝統的な儒教の体制を墮落させたからである。広東貿易のようにつまらぬ商売を、欧米人とやろうとしたから墮落して敗れてしまったのである。だから日本は強いヨーロッパに対して伝統の殻に閉じこもる方がいい、という意見であった。これが鎖国論である。そして鎖国を続けるためには、欧米人がやって来たときこれを撃ち払わなくてはならぬ、攘夷でなくてはいかぬ、というふう考えた。

攘夷論の最も単純なものは、日本刀で切りこめば敵は退くであろうから外国人を切り殺しさえすればそれで済む、という考えであった。さらに進んでややりアリスティックになると、敵の武器が優れているのだから欧米の武器をまず買い入れて、さらに製造して、それで攘夷をやるべきだ、という攘夷論にまで進んだ。

それに対して、同じく日本を欧米の侵略から守るためには、鎖国をしていては駄目なのだ、という考え方が出てきた。欧米は強いのだからそ

の強い欧米が持っている技術をわれわれは受け入れなくてはいかぬ、そのためには開国は必要なのだ、というふうに考える。

近代日本史の教科書を見ると、攘夷論と開国論は非常に違うのだという理解が多いが、当時の、軍事力の優劣による弱肉強食を原理とする国際体系を理解していた点ではさほど違わない。攘夷論も開国論もともに日本を強くしたい、日本を守りたい、という目的においても軌を一にしている。ただ、日本の国を強くするため、また守るための方法のみが違ったにすぎないのである。

だからこそ、高杉晋作のような現実政治に対する感覚の優れた男は、攘夷と開国を平気で使い分けていた。彼が短期間ではあるが、はじめて上海に赴いたときには、日本の船がロンドンやワシントンに貿易のためどんどん乗り出していくようにならなくては駄目だ、という意味のことをその日記に記している。その点では彼はたいへんな開国論者であった。ところが上海から日本に帰って来てすぐ、攘夷論者と共謀して江戸にあるイギリス公使館の焼き打ちを計画している¹³⁾。

開国論者の高杉が日本に帰ってきて平気で攘夷をやるのである。開国論も攘夷論も実は紙一重であるからこそ、このような使い分けができたのであった。同様なことははじめてイギリスに赴く船上での志道聞多と伊藤俊輔(のちの井上馨と伊藤博文)についても言える。彼らは猛烈な攘夷論者として旅立った。ところが国を出てわずか数日、上海の港に着くと、そこで見た外国の船の大きさ、多さにびっくり仰天、聞多はたちまち開国論者になってしまう。当時30歳の志道聞多の心の動揺を『世外井上侯伝』は次のように述べている。

「上海に到着するや、甲板上に立って碇泊所の内外を看渡すと、軍艦、蒸気船、風帆船などが幾百隻となく所狭きまで投錨し、出入の船舶もすこぶる頻繁を極め、その繁昌の景況には実に一驚を喫した。初め公は海軍を興隆して真の攘夷を実行しようと欲し、佐久間象山の説を聞くに及んで、その論旨と符合の点があるのを喜んだが、攘夷の一事だ

けは半信半疑の間にあった。しかして、上海に来て実際の景況を見るに及んで深く感ずる所があった。従来の迷夢はとみに覚醒した。すなはち公は、わが国人も攘夷の謬見を破り、開国の方針をとって進まねば、将来国運の隆盛は望むことは出来ないのみならず、かへってみづから衰亡を招くことに至らうと感じたのであった。⁽⁴⁾

そこで井上は、親友伊藤に、一夜にして開国論にかたむいた由縁をもらした。伊藤は「日本を出てわづか4、5日で、すでに攘夷の初志を變ずるようなことは、丈夫の恥ぢる所ではないか」と、井上の主張を退けた。⁽⁵⁾しかし、井上はこれを転機に開国論者となり、伊藤も、やがて説を改めて、開明政策の担い手となる。

V 専制対自由

さて、西欧列強と国交を開き、そして彼らを学ぶことによって国を強くしよう、ということになれば、そこで当然に欧米の政治制度、政治思想の強い影響を受けることになる。そして新しい西欧的な絶対主義体制の道を歩み始めることにより、急速に近代国家としての様相を呈し始める。

そして自由民権運動が出現する。その自由民権運動は、日本の国内政治史では進歩的な、かつ善なるものとしてしばしば描かれる。しかし、その自由民権運動の活動家が明治の中期以後、多くが大陸への進出論者であり、大陸浪人としての後半生を辿る。それゆえ、大井憲太郎の大阪事件についても評価は分かれる。これを、朝鮮人民を圧政から解放する運動の一環とみる平野義太郎氏の評価と⁽⁶⁾、主観的意図はともかく、客観的には朝鮮侵略の一環であった、とみる多数説見解とは鋭く対立する。

大井については語りふるされたことではあるが、ここで触れないわけにはいかない。当時、幕末以来の国家的な危機感の中で成長した日本の知識人たちは、多く世界の体制を強弱という軸で考えた。しかも国際社

会は弱肉強食の世界である。と同時にまた専制は強であり、自由は弱とも映じた。そしてこの専制を、あるいは東洋を侵略した欧米列強の植民地支配に見、あるいはまた朝鮮や清国における権力者に見出したのである。とすれば、専制に反対する自由民権論者は弱の側に立って専制と対決すべきである、しかも自由が正義である以上隣国の自由を助け、断乎として自由の側に立たなければならない、ということで朝鮮・清国における反政府運動に対する、日本の自由民権論者の心情的な共感は極めて強かったのである。大井は昂然と論ずる。

「日本、支那即亜細亜を改良するが為にこれを利用する意も幾分か含蓄し居れり。東洋と歐洲をかれら自由民権論者が朝鮮における反政府運動に武器をとって加担するのは、朝鮮現時の有様に就いて其国民に安全幸福を与へんとする主意なり。……中略……而して、我々は斯の所為たる……同情相憐み、艱難相救ふの好意主義に出づるものにて、相争ひ相闘ぐところの戦争にあらざるなり。……中略……即ち朝鮮人も亦父母兄弟なり。彼れ日本を助くれば日本人も亦彼を助くるの感想を起すなるべし。故に國を異にするが故に、同情相憐み相救ふの感を起こすは決して怪訝すべきに非ずして此感念を起こさざる者こそ我々却て此れを怪しむなれ。而して、朝鮮の風俗は野蛮極まる阿弗利加人の如く、其刑は三族に及ぶが如き野蛮國にして、其の國は亜細亜中殊に我國の近くにあり。然るに我が國は、之を捨てて其様を傍観するは我我自由平等の主義において黙するに忍びざる所にして、我々は此に至て之を助くるの念を生じたるものなり。……我々は普通の戦争の如く其國に対するに非ず。一部分の奸党に対すると云へば穩当なるものにて其直接の行為に於ては國に対するに非ず。又、人民に対するにあらざ。即一部の党派に対するものにして、其結果に於ても又普通の戦争は、朝鮮の大不幸なるも我々の計画より生じたる結果は安寧幸福にあり」

上は大坂事件ののち、第一審裁判所における大井の弁論の一部である

が、朝鮮における一部の党派すなわち封建的権力者を「人民」からはっきり区別していることがわかる。前者が専制であり、後者が自由なのである。だから専制を覆すために他国に干渉して何が悪い、ということになるのである。このような括弧つきの「正義」と明治日本人が持っている思春期ナショナリズム⁽⁷⁾とが結合したとき、それはたいへんな国民的エネルギーとなって、朝鮮のみならず中国に対しても爆発した。

このエネルギーの赴くところ、当初は隣国に対する解放ないし独立の役割を果たしながら、たちまち日本のナショナリズムの大波に乗じて、あらたなる専制者植民地権力として隣邦の民に臨むのである。およそすべての歴史には光と影がある。日本の近代史もまた光と影に満ち充ちており、その影の部分が、まさに、強者として隣邦に臨んだ傲然たる近代日本の軌跡となったのである。

この歴史の光と影の論理を十分に理解すれば、なぜかつての自由民権の闘士たちのうちその多くが、明治中期以後、大陸進出の急先鋒となり、偏狭な愛国者に変化していったかもまた理解されるであろう。これを無理に、あれは侵略主義者、これはアジア主義者というふうに峻別することは歴史の真実ではない。日本人の対外態度を決定する座標軸が、あるいは東洋対西洋という軸となり、あるいは専制対自由という軸になり、人により時に応じてその軸が変わっていく。しかし大多数の同時代の日本人にとっては、日本が富強になることは、強い西洋に対して弱い東洋が立ち上がることでありと理解されたし、台湾や朝鮮の植民地化は王政に対する近代的な統治の導入と理解されたのである。

もちろんこれら同時代の多くの日本人の発想は虚妄であり、現実とは遙かに醜いものであった。そして強者ナポレオンの軍隊が一旦は解放軍としてイタリアに入りながら、たちまち王政者と化したこと、ソ連軍が解放軍として東ヨーロッパに入り、たちまちソ連流社会主義の鉄の棒をはめてしまったことなど、そういった歴史の諸現象と同じ軌跡を辿ったことは、否定できない鉄のような事実である。

VI 唇齒輔車

清国の内憂外患は幕末明治の日本人にとって人ごととは感ぜられなかった。高杉は清国のことを「我が邦ノ人ト雖モ心ヲ須ヒザル可ケンヤ」⁽⁸⁾（雖我邦之人可不須心也）といい、高杉と共に上海を訪れた日比野輝寛は「嗟殷鑒トウカラズ。近ク一水ノ外ニアリ」⁽⁹⁾（嗟殷鑒不遠・近在一水之外）と、その危機感を記している。同じく共に上海を訪れた納富介次郎は難民のなかに日本をしたっている者があり、「唇齒ニ均シ」⁽¹⁰⁾と述べた旨記録しているが、これが、その後日本人が日中関係を語ることに使われた「唇齒輔車」の関係という慣用語のはしりであろう。

一方で清国のことは日本人にとって人ごとではない、殷鑑遠からずという考え方と、他方清国と日本とは西洋の侵略の前には同一運命にあり、清国がやられれば次は日本だ、という考え方とは、西洋からの圧力を前提としてはじめて成り立つ。すなわち「東洋↔西洋」という軸の上での日清一体論であった。

久坂玄瑞と横井小楠は、同じ「東洋↔西洋」という軸の上に立って清国の覆轍を鑑とせよと主張しながら、結論は攘夷と開国にひらいた。日清関係がいかにあるべきかを日本人が考える場合も、同じ「東洋↔西洋」という評価軸の上に立ちながら、時の流れとともにいろいろに分化して行く。まず何よりも、西洋に対抗するためには東洋は強くならなければならない。この当為は明治前半の日本青年の発想の共通点であった。東洋が強くなるためには、日本だけではなく、どうしても中国が強くななければならない、という願望に成長する。

1876(明治9, 光緒2)年、清国を旅行した竹添進一郎は、清国の現状を、感冒をひいたのにへたな医者が処置を誤まったものにたとえた。適切な薬をのめば、たちまち元気になろうというのである⁽¹¹⁾。ではどういう処方箋がよいか？ここにたって愛憎症候群の症状がおこる。すなわち、従来心酔していた文化的先進国であったはずの中国が弱いということになれば、にわかにその弱さを憎み、進んでこの改革強化の策に熱中する

のである。明治大正期の日本に「大陸浪人」なる型の間人が輩出した心理的根拠はここにある。

VII 紙一重の差、革命援助と侵略

1915年21ヵ条要求をつきつけた大隈重信は、1898年には有名な「支那保全論」を説いた。曰く、

「今の支那は眠っているが、これを覚醒すれば、屹度団結する。若し一度豪傑の徒が起って、国民に向って充分なる愛国心と忠義心とを吹込めば、四億の国民は直に無比の忠臣となる。……支那人はアフリカ人やインド人とは異なる民族である。」

浦敬一はロシアのアジア侵略に憤激し、みずからその侵略の実情を調査しようと、単身蘭州から西へ旅立って消息を絶ってしまった壮士である。その浦をはじめ、清国と「共同一致親睦¹²」をむすんで西洋の侵略を防ごうと考えていたのだが、1884(明治17, 光緒10)年に一転し、「大木の虫の蠹したるが如¹³」し、と診断して、清国干渉を一生の目標とするにいたる。すなわち、

「仮令支那全国を以て我属地とせずとも今日の清朝廷を滅ぼし、其弊政を改め人心を振起して国勢を盛にし、我国と相扶け東洋の大勢を挽回せば歐洲と対峙するに足るべく被存候¹⁴」

宮崎滔天の兄宮崎弥蔵は、1886(明治19, 光緒12)年に次のように考えた。

「以為く世界の現状は弱肉強食の一修羅場、……弱者の権利自由日に月に蹂躪窘蹙せらる。……苟も人権を重じ自由を尊ぶものは、須らく之が恢復の策なかるべからず。……而して之が運命の岐路は懸って支那の興亡盛衰如何にあり。支那や衰へたりと雖も、地広く人多し。能く弊政を一掃し、統一駕御して之れを善用すれば、以て黄人の権利を恢復するを得るのみならず、又以て宇内に号令して道を万那に布くに足る。要は此大任に堪ふる英雄の士の蹶起して立つ有るに在るのみ。吾

れ是を以て自ら支那に入るの意を決し、遍く英雄を物色して之を説き、若し其人を得ば犬馬の勞を執って之を助け、得ざれば自ら立て之に任せんと欲す⁹⁹」

つまり、宮崎弥蔵は「東洋←→西洋」の軸で考えて、日中兩國を運命を共にするものと見た。それ故、中国に英雄がいて清朝をたおせるならばそれを助け、できなければ、自ら清国を乗取ろうというのである。在野の日本人だけではない。政府の指導者のなかにもこのような考え方は存在していた。たとえば岩倉具視は記している。

「清国ノ如キ、亜細亞州ノ勝地ニアリ、封疆人口列國ニ卓越シ、而モ唇齒ノ旧邦ナリ。委靡不振ト雖ドモ其強弱盛衰我國ニ関ス。故ニ和誼ヲ敦フシ貿易ヲ開キ、自邇到遠ノ基ヲ創ムルハ今日ノ務ム可キ処ニシテ、其國勢ヲ窺ヒ機ニ応ジテ経略ヲ施スハ他年ノ深謀也。⁹⁹」

つまり、日中は唇齒の関係にあるからその強弱盛衰が日本に影響するところが大きい。だから、今は友好関係を近い国から順次遠い国々にまで及ぼす第一歩として日中の友好につとめるべきである。機会をうかがって経略をはかるのは将来の深い謀計である、というのである。

結語

このように、対外態度を決定する座標軸が、あるいは東洋対西洋という軸となり、あるいは専制対自由という軸となり、人により時に応じてその軸がかわっていく。そして、その軸を支える支点の役割を果たしたものは、多くの場合に、当時の日本人が抱いていた思春期ナショナルリズムであった。

もちろん例外があり、たとえば宮崎滔天は、最後まで純粋に中国革命に忠実であろうとし、個人的利権もまた、日本の權益拡張も期待しなかった。児宮崎竜介の回憶録にいう。

「滔天は頗る酒を嗜んだ。然しそれとは正反対に金銭は最も卑しんだ。

滔天が生涯を赤貧の中に終ったのもそれがためである。滔天は辛亥革

命後に、袁世凱との南北妥協問題の喧^{かまびす}しかった頃、南北和平をやることには絶対反対していた。南北和平が具体化する少し前のことである。孫文が北上して袁世凱と相会したのだったが、この時滔天の支那革命に対する功勞に酬ゆるために、袁世凱が防穀令の一部を解いて年々若干の米の輸出権を滔天に与えると云っているとて、上海にあった滔天のところに、『袁が米の輸出権を与えると云っているから直ぐ北京に來い』との電報が、北京の孫文から届いた。然しこれに対して、滔天は『渴しても盜泉の水は飲まぬ、貴下の北上さへ自分は好まない』旨の返電を打って、終に動かなかった。¹⁷⁾

つまり、あくまで中国における専制対自由の座標軸を通そうとしたのである。また鈴江言一は、東洋対西洋という思考の軸から、最初はいたいへんな愛國者として乱世の中国を輕蔑し、かつ「憎」むが、のちマルクス主義の洗礼を受けてからは、中国共産党に忠誠をつくし、一貫して中国革命に専制打倒と自由の実現の期待を持つ。¹⁸⁾

しかし、日本の近代史の流れの中では、宮崎滔天や鈴江言一のような例は少数派であった。東洋対西洋という座標軸で清国を見ようと、また、専制対自由という座標軸で中国を見ようと、その思考の支点となったものは日本だけの富強の問題であった。少なくとも、当時の大多数の日本の知識人は、そういう思考の枠組を持っていた。この枠組は中国が統一された強い国になったときはじめて破壊され、愛憎症候群の「愛」の症状が顕在化したのである。¹⁹⁾

注

- (1) 平川祐弘「謡曲の詩と西洋の詩」、朝日新聞社、1975年、199頁以下。
- (2) Shinkichi Eto, "Evolving Sino-Japanese Relations," *Journal of International Affairs*, Columbia University: New York, vol.37, no.1 (Summer 1983), pp.49ff. また、衛藤瀆吉「序論 文化摩擦とは?」(衛藤瀆吉編著『日本をめぐる文化摩擦』、弘文堂、昭和55年)、18~20頁。
- (3) 高杉は明治維新前1862年に2ヵ月余り上海に滞在した。
- (4) 井上馨侯伝記編纂会『世外井上侯伝』、東京、内外書籍株式会社、第1巻、1933

- 年刊, 90~91頁。
- (5) 同上, 91頁。
 - (6) 平野義太郎『大井憲太郎』, 吉川弘文館, 昭和40年刊, 242~243頁。
 - (7) 「思春期ナショナリズム」については衛藤藩吉『無告の民と政治』(新版), 東京大学出版会, 1980年, 105~106頁参照。
 - (8) 高杉晋作『游清五録』(東行先生五十年祭記念会編『東行先生遺文』, 東京, 民友社, 大正5年刊), 79頁。
 - (9) 東方学術協会(編)『文久二年上海日記』, 大阪, 全国書房, 昭和21年刊, 65頁。
なお, 日比野は儒学者で後年名古屋明倫堂の教授となる。
 - (10) 同上, 18頁。なお納富は佐賀藩の武士であった。
 - (11) 竹添進一郎『棧雲峡雨日記』, 東京, 明治11年刊, 自序。
 - (12) 埜 薫蔵『浦 敬一』, 東京, 淳風書院, 大正13年刊, 81頁。
 - (13) 同上, 83頁。
 - (14) 同上, 85頁。
 - (15) 宮崎滔天著『三十三年の夢』, 東京, 平凡社, 昭和44年, 復刻校訂版, 22~23頁。
 - (16) 大塚武松(編)『岩倉具視関係文書』, 第一巻, 東京, 日本史籍協会, 1927年刊, 392頁。
 - (17) 宮崎滔天, 前掲書, 309頁。
 - (18) 衛藤藩吉, 許淑真共著『鈴江言一伝』, 東京大学出版会, 1984年刊参照。
 - (19) 本稿で論じた「中心周縁関係」と「愛憎症候群」の二仮説の原型は, すでに拙稿「日本人の中国観——高杉晋作らの場合——」(仁井田隆博士追悼論文集刊行会編「仁井田隆博士追悼論文集 第3巻——日本法とアジア——」, 勁草書房, 1970年), および「序論 文化摩擦とは?」(衛藤藩吉編著『日本をめぐる文化摩擦』, 弘文堂, 昭和55年)に示されている。本稿は上記原型をさらに発展させたものである。